

街道

その歴史と役割

シルクロードのように、その昔の交易や物流の代表的な物品の名を冠した道が、日本国内にも少なからず残されています。そのうち、いくつかの街道を取り上げて、その街道が当時の金融や経済に果たした役割や背景についてご紹介しましょう。

石見

石見銀山街道

(いわみぎんざんかいどう)

石見銀山街道は、島根県大田市大森から広島県尾道市までの130kmを結ぶ街道です。

街道の起点となる大森は、江戸時代に石見銀山の代官所があった場所。その石見銀山は、室町時代末期に九州博多の豪商によって発見され、灰吹法という製錬方法の導入(1533年)によって質の高い銀を大量生産することが可能となりました。こうして、16世紀半ばからの南蛮貿易では、ポルトガル人やスペイン人が日本にもたらず鉄砲・火薬や中国産の生糸と灰吹法によって製錬された日本の銀とが交易されていたのです。

もともと、今回ご紹介する石見銀山街道が切り拓かれたのは江戸時代、徳川家康の命を受けた大久保長安によってでした。関ヶ原の戦いに勝った家康は、全国で通用する同じ規格の貨幣を発行するため、各地の鉱山を直轄化。各鉱山で産出された金や銀は、それぞれ金座(江戸、京都

など)、銀座(伏見、駿府など)に運ばれ、金貨・銀貨が鑄造されました。この街道も石見銀山で産出された銀を最終的には伏見の銀座に運ぶためのものとして整備されました。前年10月から9月までの間に生産されたものを1か年分として代官

所近くの御銀蔵で保管。1箱10貫目(約40kg)の木箱に詰め、2箱ずつを馬にのせて、毎年旧暦の10月下旬から11月上旬にかけて大森から尾道まで、牛馬270頭、人足400人が3泊4日をかけて進んだそうです。尾道からは、瀬戸内海を通り、大坂で水揚げをして、その後伏見の銀座にて銀貨として鑄造されました。

大森の現在の人口は約4000人ですが、鉱山労働者が働いた当時の人口は20万人を超えたといわれ、今では想像できないほど活気にあふれていました。街道には彼らの生活を支えた物資も盛んに行き来し、九日市・三次・甲山といった宿場が賑わいを見せていました。



江戸時代、日本の銀の輸出額は世界の銀産出額の3分の1に及び、その多くを生野産とともに石見銀山で産出された銀が占めました。次第に資源は枯渇し、銀の産出量は著しく減少、石見銀山はついに1923年に休止します。

そんな石見銀山は、2007年に鉱山遺跡としてはアジアで初めて世界遺産に登録されました。「銀を運んだ街道や銀を積み出した港も残り、さらに鉱山町や港町には今でも人が住み続けている」ところが世界遺産登録の理由の一つに挙げられています。圧巻であったであろう当時の銀輸送風景に想いを巡らせながら、石見銀山街道を旅してみませんか。